



えと文
小野功夫

去年の夏、北海道の日高へ旅をした。競走馬の生産地として有名なこの地で馬を見ることを数年前から、私はたのしみにしてきた。

サラブレッドのみごとなフォルム、完璧なバランスの骨格と筋肉が作り出した造型をじっくり見てみたい、きつとそこには、いまの私にとって必要な、なにかが見つかるとような気がして、どうしても見なければならぬ。そんな思いであったように思える。

だが、まだ何もわからない。ただ、いまでも目を閉じれば、群をなして牧草を喰む馬の姿や、斜面を戯れながら駆け上る親子の馬や、雨の日、樹の下に身をすり寄せ合った馬たちの顔、くるくると丸く黒い瞳……などが、目の前の世界を払いのけるように鮮明に浮かんでくる。大きく開いた鼻腔に大地が醸成した大自然の薫りが満ちていた。

(中学校教諭・美術)